
好みのタイプは何ですか？

祀希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好みのタイプは何ですか？

【Nコード】

N5768W

【作者名】

祀希

【あらすじ】

「ファンクラブを立ち上げませんか？」
天然生徒会長と不良くんたちの駆け引き。学園コメディ、ラブかは不明

マドンナの受難

「ヤベーよ、マジ高梨さんキレー」

「あんな美人とやりてえよな」

「や、おまえじゃ相手されねえだろ」

「うっせ！ おまえだって相手にされねえよ！」

「うっせえな！」

「あの、盛り上がっていらっしやるところ悪いんですけど」

「げ、生徒会長……！」

「その露骨に嫌な顔は気にしないでいて差し上げます。ところで、二年生男子の皆さま方」

「な、なんだよ？」

「高梨美春ファンクラブなるものを立ち上げる気はございませんか？」

「はあ？」

「ファンクラブう？」

「もちろん、美春の迷惑も考えずただ追いかけてまわすだけの低俗な集団のことではございません。美春の好みのタイプに近付くことで先ほどの妄想を現実にするための一大プロジェクトです」

「いや、先ほどの妄想って、なあ？」

「それこそてーぞくというか、なあ？」

「おだまりなさい。あなた方が美春の裸体に触れたくないというならそれでかまいません。美春は好みのタイプにはとことん甘いですから、どんな『お願い』でも聞いてくれるでしょうけど。美春にあんなことやこんなことをしてもらえるなんて男冥利に尽きるのではないかと思い、声をかけただけです。しか興味がないのなら仕方ないですね。三年生の先輩方に、」

「ちよつと待て。その話、詳しく聞かせてもらおうか」

こうして学園のマドンナ、高梨美春ファンクラブが下心の元に結成された。

「というわけです。ご理解いただけましたか？」

「なにが、ご理解いただけましたか？ なわけ？ 勝手にファンクラブとか気色の悪いもの作らないでもらえる？」

あら、と呑気に首を傾げる友人に美春は頭を抱えなくなる。入学してすぐに仲良くなったにこの友人の異常さは理解しているつもりでいたが、甘かったようだ。まさか二年生にして生徒会長に任命されるという快挙を成し遂げて早々、ファンクラブを立ち上げるとは思ってもみなかった。

「大丈夫です。美春には迷惑をかけませんから」

「ファンクラブの存在自体が迷惑なだけど」

「心配しないでください。美春に危害が及ぶ事態にはなりません」

だって、と彼女は綺麗に微笑んだ。

「男なんて皆、ただの馬鹿ですから」

静寂系男子！

「美春の好みのタイプのお話ですけど」

机の上で緩く手を組んだ彼女が言う。

彼女が学園中の男子に声をかけ始めてから一週間。すでに学園の半数以上の男子が高梨美春ファンクラブに所属していた。そのあまりの手際よさに美春は呆れているようだったが、彼女にそんなことは関係なかった。

「美春は寡黙な人が好みのようです」

かもく？　なんだそれ？　と騒ぎ出すファンクラブメンバーをぐるりと見渡して彼女はもう一度口を開いた。

「申し訳ありません。あなた方の脳ミソでも分かる言葉でお話ししましょう。美春は静かな人が好みのようです」

「静か？」

「喋るなっということか？」

「もちろん違います。たとえば休み時間に低俗な話で下卑た笑い声をたてるのをやめるとか、昼休み購買限定焼そばパン争奪戦をやめるとか、そういったことです。読書に勤しめとはいいいませんが、せめて上品かつ静謐な空気を醸し出すべきかと」

彼女の言っていることを半分も理解できていないが、とりあえずおお！ 感嘆を装ってみる。

「手始めに学校に水着姿の女性の載った雑誌を持ってくるのをやめることから始めましょうか」

「な、なぜそれを……！」

「あれだけ堂々と見ていれば小学生でも気付きます。やりたい盛りなのは分かりますが、せめて学校内で見るのはやめましょう。各家庭で存分にお楽しみください。校内にあなた方の下卑た笑い声を響かせて美春の繊細な耳に負担をかけたくないでしょう？」

そう言われファンクラブメンバーは高梨美春の姿を思い浮かべる。透けるように白い肌、艶やかな黒髪、膝を隠す程度のスカートからのぞく細い足、物憂げに外を見つめる視線。清楚だとか、か弱いだとかそういう言葉が似合う美人。

彼らの心は一つだった。

全ては高梨美春にあんなことやこんなことを『お願い』するために。

次の日から、男子が授業間の休み時間に読書をする姿が多く見られるようになる。学園始まって以来の図書館の利用率に司書の教師は目を丸くした。

真面目系男子！

「皆さん、なかなかよい調子です。最近の男子の様子が違つと美春もいぶか、……喜んでいました」

おお！ と野太い歓声があがる。

「ですが、一つだけ欠けているところがあります」

「なんだよ、生徒会長」

「オレら結構真面目になつたろ？」

「そうそこです」

「そこ？」

「皆さんの服装です。読書をする寡黙な男になつたというのにそんなダボダボした格好をしているのは合わないと思いませんか？」

「ま、まあそりゃなあ……」

「おかしいつちやおかしいよな」

「せめてそのズボンだけでもどうにかならないでしょうか。極限までおろしたズボンの裾で床を掃除してくださるのはありがたいのですかま、あまりにおろしすぎて下着が見えている方もいらっしやいます。美春にそんなものを見せてあなた方は恥ずかしくないのですか？ ベッドの上ならともかく公衆の面前で、ですよ。そういう羞恥プレイがお望みなら後々美春に『お願い』すればよろしいでしょう？」

そう言われファンクラブメンバーは高梨美春の姿を思い浮かべる。

陶器のように白い肌、甘やかな香りを纏う黒髪、学校指定の紺のハイソックスが包む細い足、静かに本の上の文字をなぞる視線。清らかだとか、儂げだとかそういう言葉が似合う美人。

彼らの心は一つだった。

全ては高梨美春にあんなことやこんなことを『お願い』するため。

次の日から、人が変わったように制服を正し始めた男子一同に生徒指導の教師が泣いて喜んだという。

ワイルド系男子！

「皆さん、素晴らしいです！ やればできるんですね！」

頬を上気させ嬉しそうに微笑む彼女にメンバーはまあな、と得意げに胸を張る。

「では次の段階に入りましょうか」

「今度はなんだよ？」

「髪の色を直せとか？」

「ピアスを取れとか？」

「いいえ。あなたが、たとえ日本人には似合わない髪色をしていても、ピアス皮膚炎と呼ばれる金属アレルギー性の皮膚炎になる危険のある物体を耳や口や鼻につけていようと文句は言いません。校則にも禁止の旨は書かれていませんから。そうではなくて、来週行われる体育祭のことです」

「ああ、あれか」

「一日かけてやるヤツだろ？」

「美春は勉強ができる人はもちろんですが、スポーツのできる人も好みます。文武両道というやつですね。一位を争い必死に戦う姿を格好良いと思う傾向にあるようです」

「だりいからサボろうかと思ってたんだけどなー」

「だよな、外とかあちいし」

「あら、美春は日に焼けたワイルドな人も好きですよ？ 巷では草食系男子というのが流行っているんですけど、軟弱な男は好みじゃないそうです」

ふむ、と頷くメンバーは気付いていない。寡黙で静謐な空気を纏い、かつワイルドな男が好みという矛盾に。いや、彼女の使う言葉の意味を半分も理解できていないというのもあるが。

彼女はにこりと笑って続ける。

「これを期に美春にアピールをしてみませんか？ 普段は読書をしてるけど、実はスポーツもできるんだぞ、と。ああ、もちろんサボりたい方はサボってくださいとかまいません。他の方が美春の目に止まったとしてもわたしの責任ではありませんし。抜け駆けだなんだとファンクラブ内で揉め事を起こさないでくださいね」

そう言われファンクラブメンバーは高梨美春の姿を思い浮かべる。

太陽の光に煌めく肌、高く結われたポニーテールが揺れる華奢なうなじ、ジャージの短パンからのぞく綺麗な膝、眩しげに自分たちを見つめる濡れた瞳。可憐だとか、純潔だとかそういう言葉が似合う美人。

彼らの心は一つだった。

全ては高梨美春にあんなことやこんなことを『お願い』するため。
に。

次の日から、休み時間の度に外に飛び出し体育祭の出場種目の練習を始める男子の姿が見られるようになった。ちなみにその半数以上が髪を黒に戻しピアスを外していたことに生徒指導の教師が泣いたのは余談である。

ワイルド系男子！（後書き）

ピアス皮膚炎は、ピアス穴が上皮化するまで衛生を保つなど注意すれば大丈夫だそうです。

生徒会長さまのただの脅しとお受け取りください

マドンナの不安(1)

「……迷惑かけないんじゃないの？」

「かけていないでしょう？ 彼らは本当に単純馬鹿、……いえ素直な人たちですよ」

「さつきから種目が終わる度にあたしの方を見てくるんだけど。キモいんだけど」

「あら、それは美春が美人だからに決まっています。彼らも美春に視線を送らずにはいられないんでしょう。微笑んでさしあげたらどうですか？ やめてくださるかもしれません」

「嫌よ。付け上がるだけでしょ」

隣に座る友人に美春はため息をつく。

最近学園がまともになってきたのは認める。窓ガラスも割れなくなったし、下品な会話も聞こえなくなった。元は男子校だったこの学園が共学になって五年、女子には過ぎづらかった学園生活もマシにはなった。でも最近いやに視線を感じるのだ。そちらに目を向けるとわざとらしく本に目を戻す輩がいくらなんでも多すぎる。少し気になる程度とはいえ、自分の知らないところで何か膨大な犠牲を払っている気がしてならない。

「今年は平和な体育祭になってよかったですね。去年は散々だったでしょう?」

「……思い出したくもないわ」

出席率は最悪、辛うじていた生徒も殴る蹴るの大喧嘩をする始末。今年は中止にしようという先生方の意見をこの友人が止めたという話も聞いている。

「さあ、美春、わたしたちの出番ですよ」

行きましょう、と柔らかに微笑んで友人は付け足す。

「馬鹿な男子が頑張っている分、わたしたちはせいぜい手を抜いて頑張りましょう?」

マドンナの不安(2)

「……迷惑かけないんじゃないかったの？」

「……いえ、わたしもさすがにあれは予想外でした」

あまり単純すぎるのも考えものですね、と顎に指を添える友人に美春はため息をつく。

午前中の種目が終わり、お昼を食べようと教室に戻る最中、どこから出てくるのかぞろぞろと男子がついてくるのだ。皆一様に美春に期待の熱視線を送っていて気色悪いことこの上ない。お昼を食べている最中も本を片手にじっと見つめてくるものだから、落ち着かず味も口々に分らなかった。

「彼らには注意しておきます」

「頼むわ」

「会長、」

後ろからかけられた声に友人はにこやかに振り向く。つられて視線をやれば副会長が眉を下げて立っていた。

「長淵くん。どうしました、何か問題でも？」

「はい、放送機器の調子が悪いみたいで。スピーカーの音量が上がらないらしいんです」

「は？　なんでそんなことを会長に報告するわけ？　放送委員がなんとかすればいいじゃない」

機嫌の悪い美春が尖った声を出すと、あうと副会長は一層眉を下げた。

その情けない姿に何か言おうと口を開くのを遮って友人はのんびり言葉を発する。

「それは困りましたね。午後は花形の玉入れもありますし」

「い、いえそれは花形じゃありません。どちらかというと最終種目のリレーの方が……」

「誰が一番速いのかを競って何が楽しいのです？　玉入れの方がよっぽど奥が深いですよ。ただ投げるだけではダメなのです。角度、速度はもちろん他の玉とぶつからないようタイミングを計って投げるのはなかなか大変です」

「そんなこと考えながら玉入れしてるのはあんただけよ。ちなみに玉入れは体育祭の種目にないわ、残念ながら」

それを聞いて友人は眉を下げる。

「それは本当に残念ですね」

心底残念そうな声音だった。

問題児くんの噂（1）

「会長！」

放送席と紙が張られたテントに現れた救世主の姿に放送委員長が泣きそうな声を出す。

「話は聞きました。どうにかなりそうすか？」

「どうやっても音量が上がらなくて……。今代わりのスピーカーを探しに行ってもらっています」

「昼休み終了まで後五分です。間に合いますか？」

「……ど、どうしましょう、せっかく皆やる気を出してくれてるのに……！」

顔を青ざめさせる放送委員長に彼女が顎に指を当てたときだった。

「直してあげよっか」

突然の声に隣に立つ副会長が悲鳴を上げた。

ゆっくりと振り返ると柔和な笑みを浮かべる金髪の少年がいた。最近見かけなくなった派手な髪色と右耳に三つ、左耳に二つついたピアス。学校指定のジャージではなくYシャツに細身のジーンズという出で立ちだが、だらしなく肩に提げられたカバンは学校指定のスクールバックだ。

「り、竜堂……！」

「りゅうどう……、あああなたが噂の」

彼女は緊迫した空気に似つかわしくない声を出す。学校一の問題児といわれる竜堂に対しても彼女はマイペースだった。

「直せるんですか？」

彼女の問いに竜堂はゆるく微笑んで頷く。

「それ旧型でしょ？それくらいなら工具あればどうにかなるよ」

「ではお願いします。どのくらいでできそうですか？」

「部品が壊れてたらどうにもならないけど、二十分もあれば」

「お願いします。五分後に開始予定ですが、まあ時間通りに集まるとは思えませんし問題ありません。放送委員長」

「は、はい！」

「万が一のために新しいスピーカー探しはそのまま続けてください。それから先生方に事情を説明して開始が遅れることを伝えていただけますか？」

「りよ、了解しました！」

敬礼までして一目散に職員室まで駆けていくのを見送って彼女は副会長に向き直る。

「長淵くんは風紀委員長に入場をあまり急かさないうつ伝えてもらえますか。そこで時間を稼ぎます。乱闘騒ぎにならないよう、それだけ見張っていてもらってください」

「はい！」

こちらもこくん、と従順に頷いて校庭入り口で監視役をしているだろう風紀委員長のもとへ駆けていく。

その様子にスピーカーの具合を見ながら竜堂が笑った。

「さすが、噂に名高い生徒会長サマだね」

よく慕われていらっしやるようで、と皮肉げに付け足した。

問題児くんの噂（2）

竜堂望りゅうどうのぞむといえば学園中の生徒が知る名前である。

その整った容姿もさることながら、喧嘩は負けなし、女を食い荒らし、顔に傷のある職業の方にも一目置かれる金色の龍。男子生徒からは憧れの目で、女子生徒からは畏怖の目で見られる男。

肋骨の骨折とナイフによる傷のせいで入院し、退院したばかりのその男は工具片手にスピーカーを直していた。

「これで大丈夫だと思うけど」

「ありがとうございます。ずいぶん手際がいいんですね」

「や、これくらいは全然。切れてた回線繋いだけだし」

感心したように頷く今話題の生徒会長ににこりと笑ってみせる。大抵の女が頬を染めるその顔にも生徒会長は表情一つ変えない。ばかりとまばたき一つでやり過ごし、微かに首を傾けた。

「……さすが、」

「はい？ 何かおっしゃいましたか？」

「いや、なにも？」

また微笑むが、生徒会長は興味をなくしたようにふいと視線を逸らした。その姿勢は左腕に収まる腕時計に向けられている。

「さして遅れもせず始められそうです。ありがとうございます、助かりました」

ちらりともう一度時計に目をやって、そしてわざとらしい間を置いてから竜堂を見上げた。

「ところで、竜堂さん。あなた、美人に興味はありますか？」

会長さまの般若 そのいち

「おおおい、なんで竜堂さんがいるんだよ？」

「おまつ、あんま大きな声出すなよ！」

「でも竜堂さんだぜ？ あの入院してたんじゃないのかよ？」

「体育祭の日に退院したらしいぜ」

「マジかよ……」

明らかに異質な存在にざわめく室内を気にするふうもなく生徒会長は「さて」と口を開いた。

「みなさん、体育祭お疲れ様でした。今年は乱闘騒ぎもなく無事終わって何よりです。昨年以上に穏やかな体育祭に美春も喜んでいました」

いつもなら図ったように声を揃えて感嘆の声を上げるメンバーが、今日は一人もそれをしない。

体育祭開け、少し日焼けした彼らのもっぱらの関心は竜堂望のフ

アンクラブ入りだった。

「竜堂さんも高梨美春狙いか？」

「マジかよ、オレらに勝ち目ねえじゃん」

「だよなー。あの竜堂さんだぜ？ オチない女はいねえって」

ざわざわと静まらない彼らに彼女は考え深げに唇の下に指を当てた。

それからおもむろに立ち上がると

ガアアアアアン！

教室の隅に置かれた鉄製のゴミ箱を蹴り飛ばした。

ででん、とゴミ箱が倒れ中に入っていた紙くずが散らばる。

一気に静まり返った教室を見渡し彼女は上品に微笑んだ。

「お話をしたいんですけど、よろしいですか」

そのあまりの恐ろしさにメンバー一同かくかくと頷くしかなかった。

推測系男子！

「あなた方は程度というものを覚えるべきです」

背筋を伸ばし椅子に腰かける彼女を見ながらもう騙されねえぞと彼らは思う。

足の甲の形にへこんだゴミ箱にチラチラと視線をやりながら絶対に怒らせてはいけないとも思う。

「体育祭の際も思ったのですが皆さん遠慮というものを知らなすぎます。あれだけぞろぞろと美春を尾行しては美春に気持ち悪、…怯えられるとは考えなかったのですか。バカですか」

「なっ……」

反論しようと口を開いたメンバーAを周りが慌てて止める。

怒らせれば命はない。大人しそうな顔してヤツは鬼だ、と視線で会話する。

ぐ、と引き下がったメンバーAに視線もくれず彼女は続ける。

「美春は怖がりですからあまり怯えさせるのは得策ではないかと嫌われたくはないでしょう？ 第一、先のことまで見越して行動で

きる男性は美春のみならずモテる要因となると思いますが？」

そう言われ死の恐怖に怯えながらもファンクラブメンバーは高梨美春の姿を思い浮かべる。

傷をつけるのを躊躇うような柔肌、頬にかかるやわらかそうな黒髪、触れれば折れてしまいそうな細い足、頼りなげに瞬く黒目がちの瞳。儚げな彼女相手に死の恐怖を感じることはない……！

少々テンパった彼らの思いは一つだった。

全てはこの恐怖から逃れ、薔薇色いちゃらぶ生活を送るために……！

現実逃避を始めた教室の片隅、壁に寄りかかるようにして立っていた竜堂だけがニヤリと口元に笑みを浮かべていた。

余談だが、少し思慮深く且つレディーファーストの精神を覚えた息子（または兄、弟）に各家庭は慌てて洗濯物を取り込んだ。

……雨は降らなかった。

騎士系男子！

「雨が降ると嫌なので、」

会長の突然の一言にファンクラブメンバーは首を傾げる。
最近は一瞬もない快晴が続いている。天気予報も向こう一週間は
晴れが続くと言っていた。

「雨の心配はねえんじゃねえか？」

「記録的豪雨ならず記録的快晴だってテレビで言ってたぞ」

「母ちゃんは最近外に洗濯干さねえけどな」

「おまえんちもか。うちも最近室内干しだ。家の中が湿気っぽい」

「うちもそうだけ」

「……皆さんがご家庭でどう思われているかは十分理解しました。
だからこそ次はこの作戦でいこうと思います」

何故か憐れみの視線を向けられ彼らは戸惑う。

「レディーファーストを極める気はございますか」

続けられた言葉に彼らは困惑を深めた。

「れでいーふぁーすと？」

「それって騎士が云々のヤツか？」

「その通りです。皆さま博識でいらっしゃる」

ぱちぱちと小さな拍手つきで誉められ「いやあ」と一様に照れるファンクラブメンバーに竜堂がくつくつと肩を震わせる。

それをあっさりスルーして会長は言葉を続けた。

「実は女性を盾にするため、毒味をさせるため、等々真実は酷いものですがそれはこの際無視しましょう。……皆さん、目の前で重い荷物を持っている女性がいたらどうします？」

「素通り」

「見なかったふり」

口々に答える彼らに彼女は上品に微笑んだ。すぐさましん、と静寂が訪れる。

少々おバカな彼らだが、危険察知能力は日々磨かれている。

「荷物を持つてあげる、が正解です。皆さんにデートする機会があるのなら彼女さんを歩道の内側を歩かせる、エレベーター内では少し彼女さんの方に体を向けてあげる、というのもいいでしょう」

ふむふむ、と彼女持ちのメンバーが頷く。

「ほんの少し女性のことを考えた行動をとる、それが乙女心を掴むのです！」

おお！ と野太い歓声が上がった。中にはメモをとる者もいる。

「もちろん美春限定ではいけません。全ての女性に優しくしなくては」

「なんでだよ？」

「あら、あなたは『あの人、わたしだけに優しいわけじゃないの……？』と可愛らしいヤキモチを焼いてほしくはないですか？」

そう言われファンクラブメンバーは高梨美春の姿を思い浮かべる。

ミルクのように白い肌、ふわりと靡く黒檀の髪、最近のあたかさでほんの少し短くなったスカートから覗く綺麗な足、照れたように笑む丸い瞳。お姫さまだとか、妖精だとかそんな言葉が似合う美

人。

彼らの心は一つだった。

全ては高梨美春にあんなことやこんなことや果てには嫉妬をして
もらうために……！

次の日から記録的な豪雨に見舞われたその地域で、原因を知らぬ
はファンクラブメンバーだけであった。

会長さまの噂

「おい、聞いたか？ 会長の噂」

「ああ、男と歩いてたって話か？」

「え、なんだそれ！ それ聞いたことないぞ！」

「なんだ、違うのか？ この前駅前でモデルっぽい綺麗な男と歩いてたって。仲良さげだったって話だぞ？」

「……まあ、会長もなかなか美人だもんな。彼氏くらいいるよな」

「高梨美春の方がインパクトあるから忘れがちだけどな」

「高梨美春を薔薇とすると会長は百合っぽいもんな」

「なんだおまえ、そのちょっと頭良さげなたとえ方は！」

「ふっ、そんなに褒めるなよ。照れるだろ。でもぽいだろ？」

「あー、ばいな。会長は百合っぽい。こう一輪だけ咲いてる感じ」

「だよなー」

「その話、詳しく聞かせてもらえるかな」

「りゅ、りりりり竜堂さんっ……！」

「そ、その話って……」

「会長の噂。ものすごく興味あるんだけど？ あ、もちろん君たちの会長に対する見解にもね」

後にファンクラブメンバー男子生徒二人は地獄を見たと言語る。

清潔系男子！

「わたしとしたことが！ 判断を誤ってしまいました！ なにより先にやるべきはこちらでした！」

「なんだよ、会長」

「どうしたんだよ、会長」

「みなさん！ ハンカチティッシュをお持ちですか！」

「はあ？」

「ハンカチい？」

「ティッシュう？」

訝しげに眉を寄せるメンバーに会長はおぞましい！ と言わんばかりに顔をひきつらせた。その時ズザッと椅子ごと後退するのも忘れない。

「みなさん、その手に！ いったいどれだけの細菌が潜んでいるとお思いですか！」

「はあ」

「手を洗い服で拭いては意味がありません！ 洗いたてのハンカチを持っていることはモテる男の大前提だと思うのです！」

最近のファンクラブ活動が『高梨美春にあんなことやこんなことをしちゃおう』作戦から『モテる男になろう』作戦に変わってきていることに気付く者はいない。

「是非ともハンカチを！ ティッシュなどと贅沢は言いませんか
らせてめてハンカチを持ってきましたよう！」

「そんなことよりさ、会長」

珍しく熱く語る彼女に竜堂が口を開いた。ファンクラブ会議中は基本的に一言も発しない竜堂のこれまた珍しい発言に教室は静まり返る。

ファンクラブ内で金髪ピアス制服着崩しを唯一保つ竜堂はメンバーの間ではもはや伝説に近い。いつ般若会長が降臨するかとハラハラしていた彼らはついにそのときがくるのか、と一斉に一步会長から距離をとる。巻き添えを食らっては命が危ない。

「男と歩いてたつて聞いたんだけど？ いったいどこの誰？」

それまで一人白熱していた会長はその問いで一気に熱が冷めたら

しい。

いたって冷静に男？ と顎に指を当て首を傾げた。

「駅前で男と歩いてた会長の目撃証言があとをたたないんだけど？」

「はあ。一つ聞きたいのですが、その男性がわたしの婚約者であろうと親戚であろうと下僕であろうと」

「今、会長下僕って言ったよな」

「言った、たしかに言ったぞ」

ざわめくメンバーちらりと見てから彼女は穏やかに口を開いた。

「あなたになんの関係がある、「元気でやってるか、僕の子猫ちゃん」

会長の声を遮る甘い声。甘ったるいキャラメルのような声に会長が珍しく笑みを見せる。

ひくり、と竜堂の顔がひきつった。

「あ、この前会長と歩いていたヤツだ」

相変わらずの静寂を保つ教室内で誰かがぼつりと呟いた。

会長さまの愛の奴隷（1）

これが会長の下僕か、とメンバーが視線を送る。その視線には多大な同情が含まれていた。

教室に入ってきた男は彼らの言葉を借りるならたしかに『モデルっぽい』容姿をしていた。

キラメル色のくせつ毛に、ニキビ一つない肌、すらりとした長い手足。顔のパーツは絶妙な位置に置かれ笑うと少し垂れ目になる。その背後には何故か大量の薔薇が飛んでいる。

「僕の子猫ちゃん、こんなむさ苦しいところで何をしてるんだい？」

長い足を活かしてすたすたと会長に歩みよりその頭を撫でる男から注目は離れない。そして相変わらず男の背後には少女マンガよろしく薔薇が飛んでいる。

ちよつとした異空間にメンバーはまた一步距離をとった。

「翔李しょうりいつお戻りに？ お帰りは三日後だと聞いていましたが」

「子猫ちゃんがお呼びとあらばすぐさま戻ってくるよ。なぜなら僕は子猫ちゃんの愛の奴隷なのだから！」

ココアにあらんかぎりの砂糖と蜂蜜と仕上げにシロップをぶちこんだような甘ったるい声に教室の半数が胸焼けを覚える。もう半数はそこはかとなく漂うキザっぱさに遠い目をしていた。

ただ一人竜堂だけが気に入らなそうに会長と翔李に視線を送っている。

「お仕事はちゃんとしてください。羽貫^{はめぬ}さんを困らせてはいけません。どうせまた抜け出してきたのでしょう」

「子猫ちゃんがそう言うなら真面目に仕事をするよ」

でもね、と翔李は甘ったるい声に甘ったるい表情をプラスして會長を抱き寄せた。

「子猫ちゃんとはんの少しも離れていたくないと思う僕の心が悲鳴をあげているよ。ねえ、僕の子猫ちゃん。子猫ちゃんへの愛に嘆く僕の心、慰めてくれるよね？」

その時、若干一名を除く全員が瞬時に理解した。

コイツ、バカだ。

会長さまの愛の奴隷（2）

「翔李暑苦しいんですが」

「照れることないだろう、子猫ちゃん。それとも僕を焦らす小悪魔ちゃんになったのかな」

「どちらでもないので離れてください」

「僕とほんの数日離れていたからって拗ねてるのかい？ 可愛いなあ、僕の子猫^{キティ}は」

「……何を言っても通じないわけですね」

椅子に座る会長を後ろから抱きしめる愛の奴隷こと翔李。会長は諦めたように息を吐きながらもそのキャラメル色の髪を撫でている。いちやつくなら他でやれよ的空気も気にならないようだった。

「またすぐ戻るのでしょうか？」

「そうだね、仕事をしなければ子猫ちゃんに叱られてしまう」

「ちゃんと仕事を終わらせてからなら怒りません。また戻らなければならぬのは大変でしょう？」

「ああ、なんて子猫ちゃんは優しいんだろう！ 僕の体を心配してくれるのかい？ ああ、でも大丈夫だよ。子猫ちゃんに会うためならばどんな苦悩も乗り越えてみせるさ！」

「いえ、翔李を追って戻ってくる羽目になる羽貫さんを心配しています。そうじゃなくても自由な翔李に振り回されている羽貫さんが疲労で倒れでもしたら誰が代わりを務められると………聞いてませんね、翔李」

はあ、と会長は盛大なため息を吐く。同情の視線が彼女に集まった。下僕願望のあるこの男よりそれに付き合わされている会長の方が数倍憐れだとさすがのバカ……ファンクラブメンバーにも分かった。

「会長、それ誰」

竜堂の不機嫌そうな問いに後ろから愛の奴隷に抱きつかれたまま会長はきょとんと首を傾げた。

「ご存知ありませんか？ この学園の理事長ですけど」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5768w/>

好みのタイプは何ですか？

2011年11月21日10時56分発行